

さよならは地層のように

與那嶺 明文

「……置いていかれてしまった」

コンビニでアルバイトを始めてからしばらくして、いつしかバイト仲間が辞める度にそんな思いを抱くようになっていた。

アルバイトなので、従業員の入れ替わりはけっこう激しい。1年やれば長い方で、半年や数か月という単位で入れ替わっていく。普通はそう長い事いるような場所ではないのだろう。そんな中で数年ぼんやりと過ごしていれば、いつの間にかベテランの扱いだ。

長くいるような場所ではないからこそ、誰かが辞める度に「先に行かれてしまった。置いていかれてしまった」という想いが頭をもたげる。

「そろそろ辞めようと思ってるんです」という言葉を何度聞いただろうか。その度に「残念だな」という気持ちと「でも、しょうがないよな」という気持ち、そして「また置いていかれてしまうのだ」という気持ちを抱いた。

気が付けば自分より長くいる人は二、三人になっていた。何年も続けている人たちだ。学生はどうしても卒業や就職が近づけば辞めなくてはならない。それと違い、主婦やフリーターは安定して仕事を続けている。人員が激しく入れ替わっても、ここだけは変わらないという安心感を無意識に抱いていた。

そんな先輩の一人が辞めることになった。東京に引っ越すことにしたのだそうだ。彼はその時点で、僕がバイトを始めたばかりのピヨピヨのヒヨッ

この頃を知ってる数少ない一人だ。「残念だな」「でも、しょうがないよな」という気持ちの中に、動揺が含まれていた。

4年間。それが彼とバイトで顔を合わせていた期間だ。仕事以外の時間に深く付き合うことはほとんど無かったけれど、それでも一つの学校に入って出るほどの時間を共に過ごした仲間なのだ。それなりの想いはある。たわいない会話や時間も、何年も降り積もれば地層のように心に紋様を刻みこんでいく。仕事をこなす量とクオリティは他の従業員よりも高く、それは彼のプライドの高さを表していたように思う。怒って怒鳴りちらしている所は見たことがない。相手のミスは理屈を持って注意していた。そんな彼の仕事の姿勢を僕は尊敬している。彼に貸してもらったいくつかの小説は今も覚えている。僕が薦めた数本の映画は彼の中に残っているかは知れない。手痛いミスをして心が折れそうだったときに吐いた恥ずかしい弱音は忘れていてほしい。笑いあったくだらない冗談はどんなものだった

か具体的には何も残っていないけれど、彼の笑い方を思い出すのは難くない。

「友達とかが送別会とかしてくれて、みんなが、寂しくなるな、とか言ってくれるんだけど自分としてはそうでもないんだよね」

彼と最後にシフトに入った日の仕事終わりに、彼はそんな風に言った。

「みんなは居なくなられる方だから寂しいって言うんだらうけど、こっちは新しい生活が始まるし、けっこうそんなに寂しいって感じじゃないんだよね」

「そういうものなんでしょうね」と僕は言った。

言うことはわかる。残される側は失うだけだけれど、旅立つ方は失われるモノ以上の新しいモノが待っているのだ。

だから僕は「寂しくなる」なんて言わなかった。なんだかフェアじゃない。悔しくてつい口をつぐんだ。

「このバイトに名残惜しいとか思います?」

「いや、全然……」

「でしょうね」

二人で笑った。

「でもきつと、君に似た人に会ったときに、君のことを思い出すんだろうな」
そう彼は言った。

そんな遠回しな言葉がひどく嬉しかった。僕もきつと彼のことを忘れな
いだろう。

長い間お世話になりました、というわざとらしいほどありふれた言葉を
もって僕らは別れた。

去りゆく彼を見て、

「……また、置いていかれてしまった」

という想いが、いつも以上に強く突き刺さった。

(了)